

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：38001

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24242036

研究課題名(和文) 琉球言語資料のデジタル化とその活用方法の研究

研究課題名(英文) A Study of the Process of Creating a Digital Archive of Ryukyu Linguistic Material and a Guide to its Use

研究代表者

狩俣 恵一 (KARIMATA, Keiichi)

沖縄国際大学・総合文化学部・教授

研究者番号：60169662

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 32,200,000円

研究成果の概要(和文)：昔話・伝説・歌謡・芸能は、言葉による伝達の他に、音声・表情・ゼスチャーなどが伴う。特に、口頭伝承が豊かな沖縄の伝統文化は、身体表現による伝達の割合が大きい。

しかし、伝承の時と場の変化とともに、伝統的な様式と精神性は変容してきた。なかでも、古典音楽の琉歌や古典芸能は、近代演劇の影響を受けて、音声・身体は大きく変容した。したがって、琉歌・組踊・古典舞踊の琉球王朝文化については、琉球土族の言葉と身体様式、その精神性に焦点をあてて研究を進めた。

研究成果の概要(英文)：In performing traditional stories, songs and other forms of entertainment, facial and physical expression are used as well as sound. As Ryukyuan culture was traditionally centered around oral communication, physical expression, including gesture and body language were particularly prominent.

But the sense of "time" and "place", along with the collective spirit and memory of the Ryukyu Kingdom performing arts is gradually changing and fading away. In several traditional arts, especially the songs of Ryukyu's classical music and classical performance are influenced by modern operatic works such as "voice", "sound" and "body-form" that are changed drastically. Therefore based on the Ryukyu dynasty classical songs, dance and performance, I am being studied to focus on the Ryukyu's collective spirit such as a "word" and "body-form" of Ryukyu's royal family.

研究分野：琉球文学・琉球芸能・民俗学

キーワード：琉球王朝文化 庶民文化 身体 様式 昔話 芸能 歌謡 継承

1. 研究開始当初の背景

昔話は口頭で伝承してきたが、語られたそのままを文字で書き記すことは不可能なことだった。発せられた声は次の瞬間、直ちに消えてしまうからである。昔話の語りを音として容易に記録することができるようになったのはテープレコーダーの発明と戦後の普及によるものだった。

沖縄の昔話の調査研究は、1972年の復帰前後に飛躍的に進展したが、その調査研究には二つの流れがあった。一つは、遠藤庄治沖縄国際大学教授が主導するもので、松谷みよ子氏が主宰する「日本民話の会」に列なる昔話研究であった。もう一つは、福田晃立命館大学教授が主導する調査研究で、柳田國男の昔話研究の系譜である。

本研究は、後者が採集した昔話資料をもとに、危機言語とされる奄美語・国頭語・沖縄語・宮古語・八重山語・与那国語の言語文化の音声資料を研究すると同時に、祭り・歌謡・芸能の録音テープ、レコード、ビデオテープなどの資料をデジタル化し、その活用方法を実践的に研究することであった。

2. 研究の目的

- (1) 祭り・昔話・歌謡・芸能における奄美・沖縄・宮古の地域差について比較検討する。
- (2) 庶民の民俗文化の身体様式と琉球土族の王朝文化の身体様式について、〈場〉〈時〉の視座から比較検討する。

3. 研究の方法

- (1) 地域差が大きい琉球語による祭り・昔話・歌謡・芸能の録音テープ、レコード、ビデオテープをデジタル化する。そして、口頭伝承における声の大小や高低、楽器や道具などの音の響き、表情や身振り・手振りの身体表現について比較検討し、ホームページによる公開を試験的に行う。
- (2) シマ言葉や庶民の身体表現とは異なる琉球王朝文化の歴史伝承・琉歌・組踊・宮廷舞踊の言葉（琉

球文を含む）及び身体表現について比較検討する。

4. 研究成果

(1) 祭祀及び昔話研究と音声資料について

本研究を進めるにあたって、昔話音声資料の提供者である福田晃氏を招いて講演を行った。福田氏は「昔話は声の民芸であり、その輝きは生活の中に存在するものである」という視点から、化石化した民俗文化財ではなく、それを生み育てた生活の歴史や民間伝承（民俗）を通して紹介される「声の民芸館」が必要であると述べた。

これまでの沖縄の昔話研究では、研究者はフィールド調査を行い、実際に語りの声を聴いたうえで、昔話のストーリーを中心に本土の伝承と比較し、検討してきた。例えば、昔話の「大歳の客」がマングナシの由来譚となり、「蛇舁入り」は宮古島狩俣の祖神祭の由来を語るなど、沖縄の昔話が祭祀・歌謡・芸能などの由来譚となる傾向にあることを明らかにした。

しかし、昔話の生きた語りがほとんど消えた今、本研究ではこれらのテープの「語りの声」を考究し、デジタル化した音声・映像資料を検討すると同時に、祭祀の様態を中心に研究を進めることとした。例えば、祖神祭の映像資料はアブンマが主唱し、他の神女が繰り返す歌唱法である。そして、それはオモロの一唱百和形式であり、祖神祭がオモロ時代の神女のあり方を窺わせる。また、それらの民間の伝承に対して、王朝文化の羽衣伝説は、王府の儀礼・制度・組織などの始原を語るが、一方民間では同類の昔話が「口説」としてジャンルを超えて伝承してきた。

要するに、沖縄の昔話のストーリーは、地域に根づいた祭りの由来譚として地域の独自性を強調するが、それに対して音声・映像資料は、王朝文化との関わりを示すと同時に、祭りや昔話の普遍性を提示する。つまり、琉球の昔話は庶民の民俗文化の伝承と土族の王朝文化の伝承があり、それらが響き合って伝承してきたことを提示するのである。

(2) 歌謡研究と音声資料について

琉球文化圏のなかで、奄美諸島・沖縄諸島・八重山諸島は歌三線がさかんであるが、祭祀歌謡が色濃く残る宮古島は三線を伴わないウタが優勢であった。宮古の場合は、古琉球のオモロ時代の祭祀文化を中心に祭りを行った。その理由は、近世琉球文化の三線音楽の普及が停滞したからであろう。

奄美諸島・沖縄諸島・八重山諸島の三線歌は、次のような特徴がある。沖縄諸島の三線歌は、〈古典の琉歌〉と〈民謡〉の二つのジャンルを継承するが、八重山では〈古典民謡〉という〈節歌〉を継承し、奄美のシマ唄は〈民謡〉一筋の継承である。

琉球古典音楽は、琉球士族語の琉歌を三線楽譜の工工四で演奏するが、奄美諸島は薩摩の琉球侵攻（1609年）以後、近世琉球の王朝文化が普及しなかったため、奄美独自のシマ唄の世界を継承するようになった。また、八重山士族は、八重山の物語歌謡を工工四で演奏し、〈古典民謡〉として継承するようになった。

工工四に規制された演奏は、一定の音域でうたうので、高音の裏声は消えたのである。デジタル化した音声資料を聴くと、かつての八重山の歌はかなりの高音で裏声もあり、沖縄民謡でも裏声があった。しかし、工工四が普及すると、八重山の歌や沖縄民謡では裏声が使われなくなった。おそらく、裏声を嫌う琉球古典音楽の影響を受けたのであろう。

また、宮古の神歌には、高音や裏声はほとんどないが、その要因は神口の〈誦む〉を基盤とした歌唱法によるものである。〈誦む〉は、〈誦詠〉〈朗誦〉であり、裏声とは関わりの薄い歌唱法である。

(3) 芸能研究と音声資料について

沖縄はかつて450年間、琉球王国として独立と繁栄を享受し、アジア諸国との中継貿易を行った。おかげで、琉球王国は近隣諸国の文化を吸収し、清楚で柔らかな琉球のチュラ（清ら）の美意識に基づいた宮廷芸能を継承してきた。

そして、宮廷芸能は、主として二大外交の場で上演された。一つは、中国の冊封使を迎えての「御冠

船踊り」であり、二つには徳川將軍家への慶賀使・謝恩使の「江戸上りの芸能」であった。そして、それらの宮廷芸能は、明治以降〈品格〉と〈芸術〉の古典芸能として継承されるようになった。

一方、琉球王国の村々では、農民たちによる野外の芸能や神事の他、本土渡来の遊行芸人のエイサーやアンガマなどが伝承された。また、村踊りのバンク（仮設舞台）では、民俗芸能化した組踊や琉球舞踊などを演じた。そして、それらは、「火の神」と士族役人を前にした神事的・儀礼的な芸能であり、地域社会の若者たちの〈元気〉を示す娯楽的な芸能であった。

ただし、琉球王国では町人社会が形成されなかったため、商業芸能が誕生したのは明治の「沖縄芝居」からだった。沖縄芝居役者は、宮廷芸能の様式化・古典化を進めると同時に、地域の民謡や本土の新派の芸を取り入れて「雑踊り」「沖縄歌劇」「沖縄方言芝居」を創出し、庶民の娯楽芸能として継承されるようになった。

おかげで、同一の役者が、古典芸能と沖縄芝居の芸能を同一の舞台で演じた。今でも同一の役者が組踊や古典舞踊の他、沖縄芝居を演じることが多い。

しかし、芸能の映像を観るかぎり、復帰前とそれ以後の役者の身体様式は様変わりしており、特に若手芸能家の所作は、かつての古典芸能や沖縄芝居の身体様式とは異なっているのが目につく。

①琉球古典芸能の身体様式

琉球古典芸能の身体様式は、能楽と同じく〈摺足〉であり、〈構え〉の立姿を重視する。しかし、映像資料から窺える琉球芸能の継承は、様式だけでなく、役者の精神性が深く関わっている。

琉球古典芸能の身体様式は、能楽とは異なって性差がはっきりしており、また歌舞伎の女形とも異なっている。歌舞伎の女形は、内股で歩き、しなをつくり、女になりきることを目指すが、琉球古典芸能の女形は男の力技で女を演じる。

近世社会では、着物や化粧など男性と女性の差異が明瞭になったため、歌舞伎や組踊では女形の身体

技法を発達させたのであろう。

琉球古典芸能の女形は、次の写真のように足先を外に向けて男性のように立つと同時に、休めの姿勢で、ガマク（腰及び脇腹）をねじるようにして下半身に重心を置く。そして、左足のつま先をあげて、重圧のかかった下半身を柔らかくみせる。

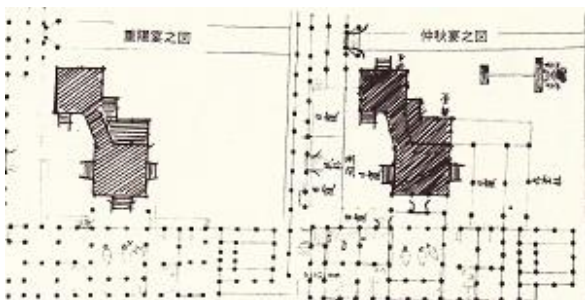


また、女形の〈唱え〉の抑揚は、柔らかで清楚な雰囲気醸し出すが、オペラの澄みきった声ではなく、歌舞伎のような話りの声とも異なっている。

②組踊の型と舞台様式

能楽は、鏡の間、橋掛、三間四方の舞台で演じるが、その舞台空間を基盤として、型が定められている。同様に琉球古典芸能の型も、宮廷芸能の御冠船踊りの舞台を基盤にしている。

次の「冠船之時御座構之図」は、1886年の寅の御冠船踊りの舞台図である。



池宮正治は、「この時の舞台は、三間半と奥行き三間の長方形をしていて、長さ二間、幅が八尺の橋懸が付き、楽屋は五間と九尺の細長いものである」と述べている。

つまり、寅の御冠船踊りでは、二間の橋掛と三間四方の舞台であり、それが琉球古典芸能の型の土台となった。そのことを踏まえて、本研究では次の写

真の舞台で組踊「大川敵討」を上演した。

次の写真が「冠船之時御座構之図」の舞台と異なるところは、楽屋の地謡席を能楽同様に舞台上手に置き、四間四方の広さにするとともに橋掛を一間にした。そして、四間四方に広がった舞台を考慮して、二間の橋掛を一間の長さに短くした。

また、かつての上手・下手の登退場は、そのつど紅型幕を手で開けたが、それを避けるため、紅型幕左右に引幕の登退場口を設けた。役者の登退場はもっとも重要であると考えてのことである。



要するに、舞台空間を基盤とした型は、舞台構造に規制される。例えば、役者の登退場は橋掛か下手か、また座る位置は舞手下か上手かなどは型の問題である。したがって、上の舞台は、組踊の型の考究に役立つと同時に、古典舞踊の身体様式を考える手立てにもなる。というのは、四間四方の舞台で踊ることは、〈手振り〉〈身振り〉の身体様式を定位すると同時に、〈間〉や〈呼吸〉を重視することになるからである。換言するならば、大勢が大劇場の大舞台で踊るため、メトロノームのリズムで〈手振り〉〈身振り〉を揃えることに腐心する近年の古典芸能は、伝統的な身体様式とは異なっているといえよう。

(4) 音声・映像資料の活用方法について

これまで収集された膨大な音声資料・映像資料を整理し、再編集可能な形式に統一してデジタル化した。収集されたメディア（音声：カセットテープ・レコード、映像：VHS・ベータ・8ミリフィルム）はアナログテープである。そのうえ、録音状態や保存状態は決してよいとは言えず、廃棄するテープもあった。そして、それらの音声・映像資料をもとに

して、祭祀・説話・歌謡・芸能の音声と動画のサンプルをインターネットで試験的に公開した。

しかし、琉球文化圏の口頭伝承は地域や家族に密着しており、内容によってはプライバシーなど多くの問題を惹起する可能性が高い。また、ネットによる垂れ流しは先祖代々の貴重な文化遺産の尊厳に関わる問題でもある。厳粛な内容で襟を正すべき祭祀・説話・歌謡・芸能の公開は慎重でなければならず、視聴者の環境にも配慮する必要がある。

また、化石化した民俗文化財ではなく、生きた民俗文化・王朝文化として活用するには、公的機関が「言語文化伝承資料センター」を設立し、デジタル化した音声資料や動画資料の整理・研究を進めることが望まれる。

〈引用文献〉

- ①福田晃『沖縄の伝承遺産を拓く 口承神話の展開』三弥井書店、2013年
- ②池宮正治『琉球芸能総論』笠間書院、2015年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 18 件)

- ①狩俣恵一「組踊の様式と精神性について」『沖縄芸能史研究会会報第』, 査読無,424号,2014,1-6
- ②真下厚「日本における洪水型兄妹始祖神話の伝承」『説話・伝承学』,査読有,第22号,2014,119-138
- ③西岡敏「沖縄民謡の語注試案(1)」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』,査読無,第35号,2014,1-23
- ④西岡敏「琉歌の句末にくるラ変動詞融合の語尾について—ui 語尾を中心に」『沖縄文化』,査読有,第116号,2014,233-248
- ⑤原田信之「察度王と我如古大主—説話の視座から」『奄美沖縄民間文芸学』,査読有,第13号,2014,3-20
- ⑥原田信之「沖縄県伊是名島的美織伝説」『新見公立大学紀要』,査読無,35号,2014,166-177
- ⑦狩俣恵一「宮古・八重山の鍛冶祭祀と伝承」『奄美沖縄民間文芸学』,査読有,第12号,2013,27-40
- ⑧狩俣恵一「口承文芸のジャンルと詞形の問題—ユ

ングトゥを中心に」『アジア民族文化研究』,査読無,第11巻,2013,229-248

- ⑨又吉光邦「石垣市立博物館所蔵 SP レコードからの採録とコンピュータを用いた音源のノイズ低減処理」『八重山博物館紀要』,査読無,第22号,2013,8-19
- ⑩田場裕規「組踊の身体—身体感覚・身体技法の伝承」沖縄国際大学南島文化研究所紀要『南島文化』,査読有,第35号,2013,7-18
- ⑪狩俣恵一「組踊の身体と舞台構造の研究」沖縄国際大学南島文化研究所紀要『南島文化』,査読有,第35号,2013,1-6

〔学会発表〕(計 17 件)

- ①西岡敏「琉球歌謡資料における漢字仮名交じり表記について」,奄美沖縄民間文芸学会,2014.9.22,沖縄国際大学(宜野湾市)
- ②田場裕規「組踊執心鐘入と演出—研究上演「沖縄の古典芸能を考える」を例に一」,奄美沖縄民間文芸学会,2014.9.22,沖縄国際大学(宜野湾市)
- ③西岡敏「琉球宮古方言の言語地理学的研究から見えてくるもの」,沖縄言語研究センター,2014.7.5,琉球大学(西原町)
- ④田場裕規「組踊執心鐘入の教材性—伝統的な言語文化の教材として」,全国大学国語教育学会,2014.5.17,愛知県産業労働センター(名古屋市)
- ⑤西岡敏「首里方言の記述文法」,沖縄言語研究センター,2014.5.14,琉球大学(西原町)
- ⑥狩俣恵一「古典芸能と社会—組踊の世界—」,日本私立大学協会九州支部,2013.10.29,ANA クラウンプラザホテル沖縄ハーバービュー(那覇市)
- ⑦狩俣恵一「一人語りの文芸—ユングトゥをめぐって—」,奄美沖縄民間文芸学会,2013.9.28,大浜信泉記念館(石垣市)
- ⑧狩俣恵一「沖縄の来訪神—石垣島川平のマユンガナシの神口をめぐって—」,説話・伝承学会,2013.4.28,静岡文化芸術大学(浜松市)

〔図書〕(計 3 件)

①田場裕規、村上呂里、萩野敦子、他『沖縄から考
える「伝統的な言語文化」の学び論』,溪水社,
2014, 292, 田場 111-148

②真下厚、狩俣恵一、工藤隆志、他『古事記の起
源を探る 創世神話』,三弥井書店, 275,2013,真
下 1-25 p, 狩俣 88-108

③狩俣恵一、『改訂版 種子取祭』, 瑞木書房,
2013年、98頁

〔産業財産権〕(計0件)

①出願状況(計0件)

②取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ

タイトル:「琉球語による音声と身体の伝承」

HPアドレス: <http://skillet.jp/user/densho/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

狩俣 恵一 (KARIMATA, Keiichi)
沖縄国際大学・総合文化学部・教授
研究者番号: 60169662

(2) 研究分担者

①西岡 敏 (NISHIOKA, Satoshi)
沖縄国際大学・総合文化学部・教授
研究者番号: 30389613

②小嶋 賀代子 (KOJIMA, Kayoko)
(下地 賀代子; SHIMOJI, Kayoko)
沖縄国際大学・総合文化学部・准教授
研究者番号: 40586517

※2012年10月31日～2014年3月10日迄

③真下 厚 (MASHIMO, Atsushi)
立命館大学・文学部・教授
研究者番号: 50209425
※2012年10月31日～2014年9月25日迄

④又吉 光邦 (MATAYOSHI, Mitsukuni)
沖縄国際大学・産業情報学部・教授

研究者番号: 50269172

※2012年10月31日～2014年3月31日迄

⑤照屋 誠 (TERUYA, Makoto)
沖縄県立芸術大学・付置研究所・研究員
名桜大学・国際学群・講師(2013.4.1～)
研究者番号: 60626068

※2012年10月31日～2014年3月31日迄

⑥田場 裕規 (TABA, Yuuki)
沖縄国際大学・総合文化学部・准教授
研究者番号: 80582147

⑦浦本 寛史 (URAMOTO, Hiroshi)
沖縄国際大学・経済学部・准教授
研究者番号: 50582144

⑧原田 信之 (HARADA, Nobuyuki)
新見公立大学・看護学部・教授
研究者番号: 60290508

※2014年4月1日～2015年3月31日迄

(3) 連携研究者

又吉 光邦 (MATAYOSHI, Mitsukuni)
沖縄国際大学・産業情報学部・教授
研究者番号: 50269172
※2014年4月1日～2015年3月31日迄